

藤沢市
ケアを担う子ども(ヤングケアラー)についての調査
《教員調査》

報告書

一般社団法人 日本ケアラー連盟
ヤングケアラープロジェクト



2017年6月

目次

調査結果の要旨 3

1. 調査の目的 4

2. アンケート調査の概要 4

3. 回答者の属性 5

4. ケアを担う子どもに対する回答者の意識 5

5. 家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒の詳細 7

6. 教員としてできるサポート、役立つ支援 20

[資料] アンケート用紙 22

ヤングケアラー

家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子どものことです。

ケアが必要な人は、主に、障がいや病気のある親や高齢の祖父母ですが、きょうだいや他の親族の場合もあります。



障がいや病気のある家族に代わり、家族に代わり、幼いきょうだいの買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている



障がいや病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている



目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている



日本語が第一言語でない家族や障がいのある家族のために通訳をしている



家計を支えるために労働をして、障がいや病気のある家族を助けている



アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族に対応している



がん・難病・精神疾患など慢性的な病気の家族の看病をしている



障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている



障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている

調査結果の要旨

これは、2016年に藤沢市の教員に対して実施されたヤングケアラー調査の報告書です。藤沢市の公立小中学校・特別支援学校55校の教員1,098人の回答を分析しています。

- 回答者の41%は、「ヤングケアラー」や「ケアを担う子ども」などの言葉を聞いたことがあると答えました。
- 回答者の68%は、今年度担任をしていると答えました。
- 今年度、自分が担任をしているクラスの中で、家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒がいると答えたのは、122人でした。クラス担任をしている先生の5人に1人近くが、現在担当しているクラスの中に、家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒がいると認識していました。
- 今年度を含め、これまでに教員として関わった児童・生徒の中で家族のケアをしているのではないかと感じた子どもがいたと答えたのは、回答者の49%でした。
- ケアをしている子どもの家族構成に関する回答は、「母と子ども」が40%、「ふたり親と子ども」が35%、「父と子ども」が5%で、ひとり親の家庭と答えた回答の割合が高くなっていました。
- 子どもがしているケアの内容として多く挙げられたのは、家事(54%)、きょうだいの世話(53%)でした(複数回答)。見守りなどを含む感情面のサポート(13%)、食事や着替えなどの身のまわりの世話(16%)を挙げた回答もみられ、13の回答は、子どもが入浴介助やトイレ介助などの身体介助も行っていると答えていました。
- その子どもがケアをしていることにどのように気づいたのかは、【子ども本人の話】を挙げた回答が圧倒的に多くみられました。そのほか、学校を休む、保護者の話、家庭訪問、面談、校内会議なども、子どもがケアをしていることに先生が気づききっかけとなっていました。
- 子どもがどれほどの期間、家族のケアをしているかについては、知らないと答えた回答が79%でした。知っていると答えた人が具体的に書いた期間として多かったのは、3年以上で、数年単位でケアに携わっている子が多い結果となりました。
- ケアをしている子どもの学校生活に出ている影響として多く挙げられたのは、欠席(56%)、学力がふるわない(42%)、遅刻(40%)でした。
- その状況にどう対応したかについては、子どもや保護者に話を聞いたり見守ったりするなどの働きかけ、学習や登校や生活能力習得をサポートするなどの直接的な支援、学校内での連携、学校外の機関との連携が挙げられました。
- 教員としてどんなサポートができると思うか、どんな支援が役立つと思うかについては、児童・生徒本人へのサポート、親や保護者へのサポート、学内の教職員との連携、行政機関・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・民生児童委員などとの連携といった意見が多くみられました。

家族のケアをしているのではないかと感じた子どもがいたと答えた回答者に、最も印象に残る児童・生徒1人についてその具体的な状況を書いていただき、508の有効回答を分析しました。

- ケアをしている子どもの性別に関する回答は、62%が女子、38%が男子でした。学年は小学1～2年生が34、3～4年生が68、5～6年生が135、中学生が256という回答数になりました(未記入回答などは除く)。
- 子どもがケアをしている相手として多く挙げられたのは、きょうだいとお母さんでした。(きょうだい47%、母42%、父10%、祖母3%、祖父2%、その他4%)。1の子が複数の家族員をケアしていると答えた回答も56ありました。
- ケアを受けているお母さんの状況として多かったのは、精神的な問題でした。ケアを受けているきょうだいは、幼いために、年上のきょうだいから日常の世話などを受けていました。

1. 調査の目的

本調査は、藤沢市の公立小学校・中学校・特別支援学校全 55 校の教員を対象に行われた、ヤングケアラーに関する調査です。2015 年に南魚沼市で実施された調査に続き、市の教育委員会の全面的な協力を得て体系的に行われた、日本で 2 番目のヤングケアラー調査になります。

ヤングケアラーとは、2 ページの図で示している通り、慢性的な病気や障がい、精神的な問題のある家族をケアしている 18 歳未満の子どもを指す言葉です。一般に、未成年の子どもは、家族の中で、親や保護者に守られ、世話をしてもらって存在であるというイメージされています。しかし、親が病気になったり障がいがあったりする場合、また、家族でケアを要する人がいる場合、子どもは、通常であれば大人がするとされるようなレベルのケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、家庭をまわしていくための人間関係の調整などを担います。こうしたケアを担うことを通して、子どもは多くのことを学び、自分が家族の役に立っていると強く感じることもあります。しかし、その役割や責任が年齢に釣り合わない不適切なものである時や、そうしたケアを担う期間が長期にわたる時には、自らの心身の発達や人間関係、勉強にも大きな影響を受け、その将来がかなり変わってくる場合があります。

この調査は、学校という教育現場でヤングケアラーがどのように認識されているのか、その実態を明らかにし、ケアを担う子どもや若者への効果的な支援や政策につなげていくために実施しました。

今回調査を行った藤沢市は、人口はおよそ 42 万人、規模からいけば神奈川県 4 位の都市です。東京のベッドタウンという性格を持つ一方で、市内にはメーカー企業の工場も多く立地しています。1985 年に開設されたインドシナ難民定住センターがあった大和市と隣接していることなどから、外国人も多く、住民基本台帳では平成 28 年（2016 年）7 月の時点で約 5,500 人（約 1.3%）の外国人が住んでいると報告されています。こうした特徴を持つ大都市圏において、ケアを担う子どもは学校の先生にどのように認識されているのか、その実態を調べ、それぞれの地域に合った支援体制を構築するための基礎資料とすることが、今回の調査の目的です。

2. アンケート調査の概要

今回の調査は、藤沢市の公立小学校・中学校・特別支援学校計 55 校の教員 1,812 人を対象として行われ、1,098 人が回答しました（回収率 60.6%）。そのうちの 534 人が、これまでに教員として関わった児童・生徒の中で家族のケアをしているのではないかと感じた子どもがいると答えた結果になりました。534 人のうち、今年度自分が担任をしているクラスにそうした児童・生徒がいると答えたのは 122 人でした。

対象：藤沢市の公立小学校・中学校・特別支援学校の教員 1,812 人

（学級担任や公務分掌を担当している臨時的任用職員も含めた教員、養護教諭の数）

（内訳）	小学校（35 校）	教員数 1,069 人
	中学校（19 校）	教員数 659 人
	特別支援学校（1 校）	教員数 84 人

実施時期：2016 年 7 月 12 日～30 日

実施方法：無記名式自記式アンケート（各学校を通して配布、回収）

※アンケートの全文は、22～23 ページに掲載しています

3. 回答者の属性（問1～問3）

回答者：1,098人

<性別> 男性 440人（40.1%）、女性 650人（59.2%）、未記入 8人（0.7%）

<勤務校> 小学校 647人（58.9%）、中学校 406人（37.0%）、
特別支援学校 38人（3.5%）、未記入 7人（0.6%）

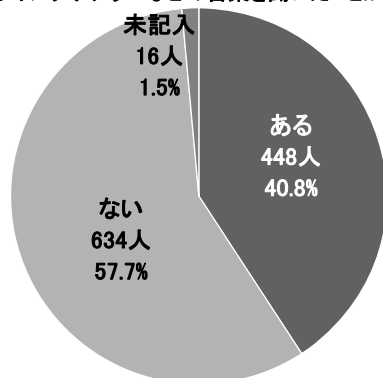
<今年度、担任をしているかどうか> 担任をしている 747人（68.0%）
担任をしていない 343人（31.2%）
未記入 8人（0.7%）

4. ケアを担う子どもに対する回答者の意識

1) ヤングケアラーなどの言葉を聞いたことがあるか（問4）

今までに、「ヤングケアラー」もしくは「ケアを担う子ども」などの言葉を聞いたことが「ある」と答えたのは、回答者1,098人中の448人（40.8%）でした。

●ヤングケアラーなどの言葉を聞いたことがあるか



2) 今年度、教員として関わっている児童・生徒の中で、家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒はいるか（問5）

今年度、自分が担任をしているクラスにそうした児童・生徒がいると答えたのは、122人でした。クラス担任をしている先生747人のうち、5人に1人近くが、現在のクラスの中に家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒がいると認識していることとなります。

122人のうち、クラスの中にそういう子どもが1人いると答えたのは84人、2人いると答えたのは24人、3人以上と答えたのは11人でした。このようにして挙げられた子ども・若者の数は170人で、藤沢市の公立小中学校の2016年度の在籍児童・生徒合計数33,885人から、ヤングケアラーかもしれないと教員が認識している子ども・若者が170人見出されたかたちです。

今年度、自分が担任をしていないクラスの中にそうした児童・生徒がいると答えたのは、185 人でした。担任をしていないクラスについては、担任をしているクラスよりも「わからない」と答えた人が多く、逆に言えば、クラス担任を受け持っている教員は、クラスの児童・生徒の状況にある程度把握していることがうかがえます。

●今年度、関わっている児童・生徒の中にケアをしている児童・生徒はいるか

	自分が担任をしているクラス	自分が担任をしていないクラス
いる	122	185
いない	500	236
わからない	116	606
未記入	8	71
無効回答	1	-
合計	747	1,098

3) 過去に（昨年度までに）、教員として関わった児童・生徒の中で、家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒はいたか（問6）

昨年度までに自分が担任をしたクラスの中に、そうした児童・生徒がいたと答えたのは、302 人でした。昨年度までに自分が担任をしていないクラスの中に、そうした児童・生徒がいたと答えたのは、268 人でした。

●過去に関わった児童・生徒の中にケアをしている児童・生徒はいたか

	自分が担任をしていたクラス	自分が担任をしていなかったクラス
いた	302	268
いなかった	478	229
わからない	203	511
未記入	115	90
合計	1,098	1,098

4) 問5・問6の考察

今年度を含め、これまでに教員として関わった児童・生徒の中で家族のケアをしているのではないかと感じた子どもがいる（いた）と回答したのは、1,098 人の回答者中 534 人でした。これは重複を省いた数で、回答者の 48.6%にあたります*1。すなわち、アンケートに答えた人の 2 人に 1 人近くが教員としての生活の中でそのような感じた経験を持っていました。

ただ、この数の中には、家族に病気や障がいがなくとも、きょうだいの日常の世話をしているケースもおそらく含まれていると考えられます。必ずしも家族の病気や障がいによらないケースでも、貧困などの理由で、子どもや若者が年齢の割に重いケアを担い、その学校生活などに影響が出てしまっているという事実はあり、それを先生方が認識しておられるという状況が今回の調査から浮かび上がりました。

*1 たとえば、

- ①今年度自分が担任をしているクラスの中に「いる」
 - ②今年度自分が担任をしていないクラスの中にいるかは「わからない」
 - ③過去に自分が担任をしていたクラスの中に「いた」
 - ④過去に自分が担任をしていなかったクラスの中に「いた」
- を選択した回答者は、「1 人」としてカウントしています。

5. 家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒の詳細（問7 有効回答数 508）

これまで教員として関わった児童・生徒の中で家族のケアをしているのではないかと感じた子どもがいる（いた）と回答した人には、最も印象に残る児童・生徒1人について、その具体的な状況を記入していただきました。該当者 534 人の回答のうち、有効回答としてカウントされたのは 508 回答でした*2。

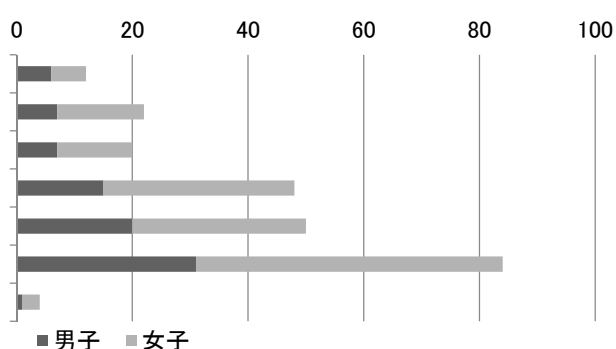
*2 有効回答とならなかった回答には、未記入回答のほか、書いていた記述を途中で消しつつ消し忘れが残ったものなどが含まれます。

1) ケアをしている子どもの学年と性別

子どもの学年については、以下の表の通り、小学校高学年頃から数が増え、小学6年から中学3年にかけての学年を答えた回答がかなりの数みられました。子どもの性別は、「男性」と答えた回答が193、「女性」と答えた回答が314となり、男女の比率は4：6ほどになりました。

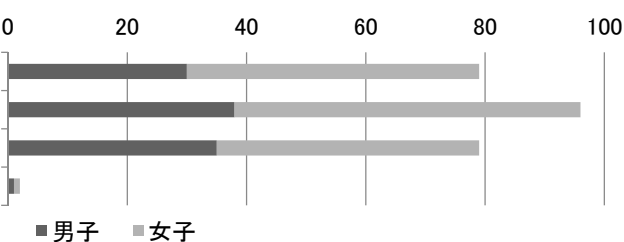
●ケアをしている子どもの学年と性別(小学校)

	男子	女子	未記入	合計
1年生	6	6	0	12
2年生	7	15	0	22
3年生	7	13	0	20
4年生	15	33	0	48
5年生	20	30	0	50
6年生	31	53	1	85
未記入	1	3	0	4
合計	87	153	1	241



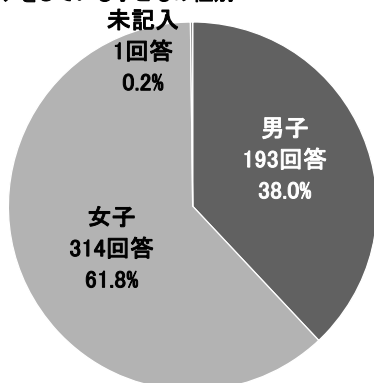
●ケアをしている子どもの学年と性別(中学校)

	男子	女子	合計
1年生	30	49	79
2年生	38	58	96
3年生	35	44	79
未記入	1	1	2
合計	104	152	256



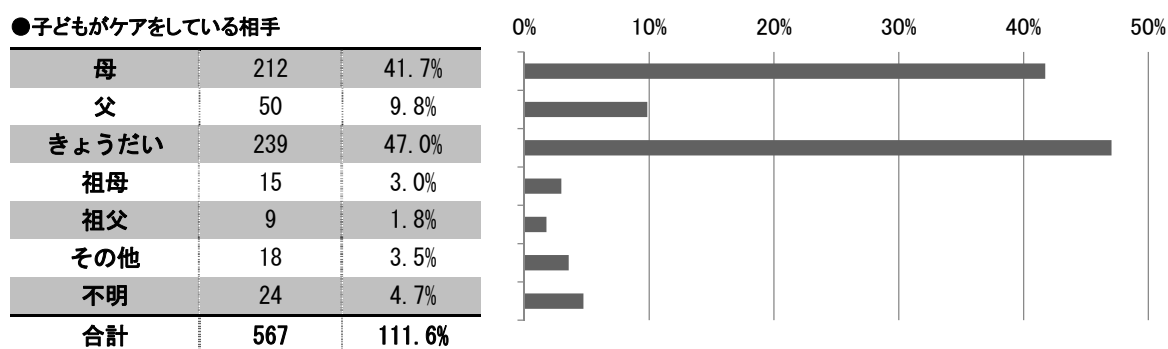
※そのほか、学年に関する集計に入れられなかった回答が11ありました（学校も学年も未記入の回答3、選択肢にない「高校」を書いた回答6、「中学卒業」と書いた回答1、小学校か中学校か不明で「2年」と書いた回答1）

●ケアをしている子どもの性別



2) 子どもがケアをしている相手とその状況

子どもがケアをしている相手は、母親ときょうだいが多い結果となりました。子どもが祖父や祖母を介護しているケースもありましたが、それは、子どもがきょうだいや母や父をケアしているケースに比べて、はるかに少ないことがわかります。母親をケアしているケースは 212、きょうだいをケアしているケースは 239 でした。ケアをされている母親はケアをされている父親の 4 倍で、子どもがケアをしている相手が大人である場合、それは女性である確率が高いことが示されています。「その他」の項目では、甥や姪などが多くみられました。「母」と「きょうだい」のように、子どもが複数の家族をケアしているケースも 56 みられました。中でも、母に精神疾患があり、その母のケアときょうだいの世話をしているケースは 11 ありました。



※複数回答の割合（回答比率）については回答数ではなく回答者数で割っているため、合計しても 100%にはなりません

ケアの受け手がどのような状況にあるのかについては、表中①～⑩の選択肢をつくり、当てはまるものをすべて選んでもらいました（複数回答）。子どもがケアをしている母の状況としては精神疾患が多く（212 回答のうちの 72 回答）、子どもがケアをしているきょうだいの状況としては、幼いという理由が圧倒的に多くみられました（239 回答のうちの 183 回答）。

●子どもがケアをしている相手の状況

	母	父	きょうだい	祖母	祖父	その他
①癌などの病気	20	6	0	1	0	0
②身体障がい	11	3	5	4	1	0
③知的障がい	3	0	15	0	0	0
④視聴覚障がい	8	5	0	0	0	0
⑤精神疾患	72	6	0	0	0	0
⑥認知症	1	0	0	2	0	1
⑦依存症	4	0	1	0	0	0
⑧幼い	4	0	183	0	0	9
⑨その他	53	21	15	4	3	6
⑩わからない	27	8	5	3	5	1
未記入	9	1	15	1	0	1
合計	212	50	239	15	9	18

ケアしている相手の状況を書いた自由記述回答は、母の状況を書いたものが 145 回答、父の状況を書いたものが 35 回答、きょうだいの状況が 126 回答、祖母の状況が 10 回答、祖父の状況が 7 回答、その他についてのものが 13 回答でした。母親をケアしているケースについて書かれた 145 回答の記述で最も多かったのは、上記の表「⑤精神疾患」の具体的な状況で、うつ病（21 回答）、精神的に不安定（10 回答）、日常生活の支障（24 回答）、統合失調症（3 回答）などが書かれていました。次いで多かったのは「⑨その他」の具体的な内容で、外国籍や日本語が苦手であるという状況（27 回答）が主なものでした。母親をケアしている中学生では「①癌などの病気」（15 回答）もその次に多く、病名や通院・療養中の様子に関する記述がありました。父親をケアしているケースについて書かれた 35 回答の記述では、「⑨その他」の内訳として、外国籍・日本語が苦手であるという状況（11 回答）、ケガによる療養や後遺症（3 回答）が挙げられていました。きょうだいをケアしているケースについて書かれた 126 回答の記述では、「⑧幼い」ことの具体的な状況として、日常の世話が最も多く挙げられました。さらに、病気時の世話についても多く書かれていました。

3) 家族構成

家族のケアを担っている児童・生徒の家族構成については、表中①～⑨の選択肢をつくり、当てはまるものを 1 つ選んでもらいました。その結果をみると、母子家庭の割合が高いことがうかがえます。平成 22 年国勢調査（総務省統計局）では、藤沢市の一般世帯数は 171,818、そのうち「女親と子供から成る世帯」は 12,057（7.0%）、「男親と子供から成る世帯」は 2,142（1.2%）、「夫婦と子供から成る世帯」は 56,170（32.7%）となっています。この国勢調査と比べると、今回、ケアを担う子どもに関する具体的な状況を書いた回答者の 4 割が子どもの家族構成として「母と子ども」を挙げたのは、かなり高い比率であると言えます。

●家族構成

①母と子ども	203	40.0%
②父と子ども	25	4.9%
③母と子どもと祖父母	22	4.3%
④父と子どもと祖父母	6	1.2%
⑤ふたり親と子ども	178	35.0%
⑥ふたり親と子どもと祖父母	14	2.8%
⑦祖父母と子どものみ	3	0.6%
⑧その他	25	4.9%
⑨わからない	22	4.3%
未記入	7	1.4%
無効回答	3	0.6%
合計	508	100.0%

4) 子どもがしているケアの内容

子どもがしているケアの内容については、イギリスのヤングケアラー調査を参考に表中①～⑩の選択肢をつくり、当てはまるものをすべて選んでもらいました（複数回答）。子どもがしているケアの内容として多かったのは、家事ときょうだいの世話でした。

「⑨その他」に寄せられた 31 の自由記述回答では、小学生、中学生ともに、通訳が最も多く挙げられていました。

●子どもがしているケアの内容(対象回答数=504)

①家事(料理、掃除、洗濯など)	275
②生活をまわしていくための、買い物、家の中の修理仕事、重いものを運ぶなど	99
③請求書の支払い、病院への付き添いや通訳など	30
④身の回りの世話(食事や着替えの介助、移動介助など)	83
⑤医療的な世話(服薬管理、たんの吸引など)	5
⑥感情面のサポート(ケアの受け手の精神状態を見守って言うことに対応すること、落ち込んでいる時に元気づけることなど)	67
⑦身体介助(入浴介助やトイレ介助、体拭きなど)	13
⑧きょうだいの世話	268
⑨その他(具体的に)	33
⑩わからない	28
合計	901

5) その子どもがケアをしていることに、どのように気づいたか

この質問に寄せられた 450 の自由記述回答をグループ分けして分析したところ、次頁のようになりました*3。最も多かったのは【子ども本人の話】で、他のカテゴリーに比べて圧倒的に多い結果となりました。内訳としては、日常の会話や雑談の中で児童・生徒が何気なく自分から話した場合、欠席や遅刻の理由を聞く中で明らかになった場合が多数を占めましたが、生徒との面談、生徒のほうから申し入れた相談、問題行動に対する聞き取りでわかった場合などもありました。次いで多かったのは【学校を休む】の 72 ですが、その内訳をみると、小学生のほうが中学生よりかなり多くなっていました。13 ページの「子どもの年齢層と学校生活への影響」のところで詳述する通り、欠席は中学生のほうが多いのですが、小学生が学校を休む時には、それがきっかけとなって子どもがケアをしていることに先生が気づくケースがかなりあるようです。【保護者の話】や【家庭訪問】は小学生や中学生で同程度にみられますが、【面談】や【校内会議】をきっかけに気づいたという回答は、中学生のほうが多くなっていました。

*3 自由記述回答を概念項目として数える際には、たとえば、「本人からの話 前担任からの情報 家庭訪問をして見たこと」という記述は、【子ども本人の話】【引継ぎ】【家庭訪問】【目の前で見た】の各項目にカウントしました

●その子どもがケアをしていることに、どのように気づいたか(対象回答数=450)

	総数	ケアをしている子ども・若者の年齢層		
		小学 (211 回答)	中学生 (231 回答)	年齢層別 集計不能 (8 回答)
子ども本人の話	206	99	102	5
学校を休む	72	48	24	0
保護者の話(連絡帳を含む)	68	30	37	1
家庭訪問	58	27	29	2
面談	41	13	28	0
校内会議など	41	9	31	1
担任から聞いた	34	19	15	0
引継ぎ(前担任から、前年度から、小学校から、 保育園から、スクールカウンセラーからなど)	29	12	15	2
関係機関からの情報(児童相談所、民生委員、 ケース会議、保護司からなど)	20	8	12	0
目の前で見た、経験した	19	11	8	0
遅刻	13	7	6	0
不登校・不登校気味	12	5	7	0
転入・転出時、転出先の先生の話	6	5	1	0
他の保護者、地域の人、近所の人から	6	3	3	0
本人の友達の情報	5	1	4	0
身だしなみ	5	2	2	1
作文・日記から	4	3	1	0
電話	4	1	3	0
部活動ができない、入部ができない	3	0	3	0
きょうだいの話	2	2	0	0

6) 子どもがどれぐらいの期間、家族のケアをしているかについての認識

子どもがどれほどの期間、家族のケアをしているかを知っているかについては、「知らない」と答えたケースが 508 回答中 403 を占めました (79.3%)。学校の先生は、子どもがケアをしている期間を知らない場合が多いことがうかがえます。

「知っている」と回答した 94 人には、具体的にどれほどの期間であるかを記入してもらいました。それを分類していったところ、最も多かったのは 3 年以上 (29 回答)、次いで多かったのは 2 年～3 年未満 (28 回答) となり、数年単位でケアに携わっている子が多い結果となりました。長期にわたるケアは、子どもの学校生活にも影響を及ぼしていると考えられます。

●子どもがどれぐらいの期間、家族のケアをしているかについての認識

知らない	403
知っている	94
未記入	11
合計	508

●子どもがケアしている期間

半年未満	3
半年～1年未満	7
1年～2年未満	14
2年～3年未満	28
3年以上	29
無効回答※	12
未記入	1
合計	94

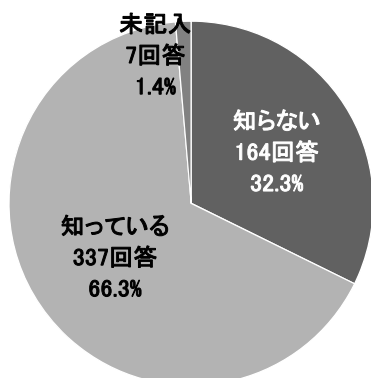
※「小学3年ぐらいからずっと」「現在も」「1～3年」など数値的に集計不能だった回答

7) その子どもがケアをすることになった理由についての認識

なぜその子どもがケアをすることになったかについては、「知っている」と答えた人が全体の3分の2を占める結果となりました。

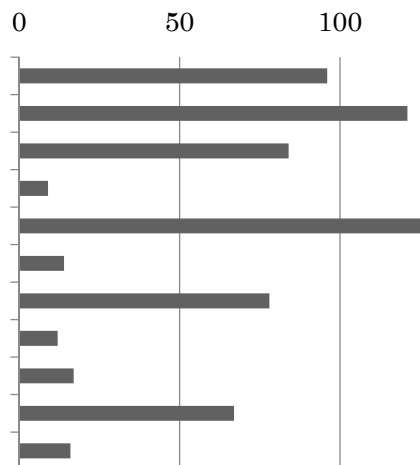
「知っている」と答えた人には、表中①～⑪の選択肢を挙げ、当てはまる理由すべてに○をしてもらいました（複数回答）。理由として多かったのは、「年下のきょうだいがいるため」（128回答）と「ひとり親家庭であるため」（121回答）、「親の病気・障がい・精神疾患や、入院のため」（96回答）でした。

●ケアすることになった理由を知っているか



●子どもがケアすることになった理由（対象回答数=337）

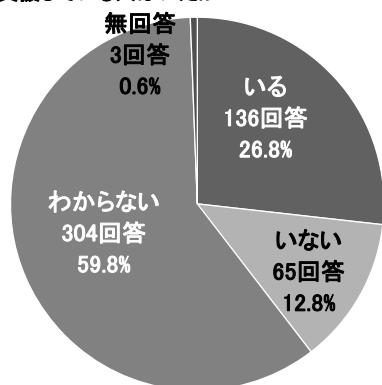
①親の病気・障がい・精神疾患や、入院のため	96
②ひとり親家庭であるため	121
③親が仕事で、家族のケアに十分に携われないため	84
④祖父母の病気や加齢、入院のため	9
⑤年下のきょうだいがいるため	128
⑥きょうだいに障がいがあるため	14
⑦親が家事をしない状態のため	78
⑧福祉などのサービスにつながないため	12
⑨自発的に	17
⑩他にする人がいなかったため	67
⑪その他	16
合計	642



8) その子どもの他にその家庭を支援している人についての認識

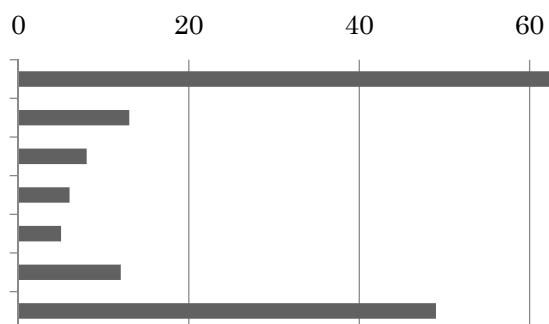
その子どもの他にその家庭を支援している人があるかどうかについては、「わからない」と答えた人が 6 割近くで、先生が把握していないことが多いようでした。「いる」と答えた人には、表中①～⑦の項目を挙げ、当てはまるものすべてに○をつけてもらいました（複数回答）。支援する人の内訳としては、「親戚」が多く、64人が○をつけましたが、「その他」に○をつける人も多くみられました。

●他に支援している人はいたか



●その家庭を支援している人(対象回答数=136)

①親戚	64
②近隣・ボランティア	13
③ホームヘルプサービス	8
④訪問診療・訪問看護など	6
⑤デイサービス・ショートステイなど	5
⑥具体的にはわからない	12
⑦その他	49
合計	157



「その他」に設けた自由記述欄には 48 の回答が寄せられました。行政関連の部署、職員を挙げたのは 30 回答で、市の子ども家庭課、児童相談所といった「子ども関連」の部署（15 回答）、生活援護課、生活困窮者支援など、「生活困窮関連」の部署（5 回答）、「教育委員会」（1 回答）、「保健師」（1 回答）などが挙げられました。

この欄にプライベートな人間関係に基づく支援者を書いた回答も 21 あり、その内訳は、親（4 回答）、きょうだい（5 回答）、祖父母（6 回答）、母の友人（2 回答）、母の恋人（2 回答）、友人（1 回答）、知人（1 回答）、教会の仲間（1 回答）でした。その他、「民生委員」（1 回答）、「外部サービス」（1 回答：通訳）なども挙げられました。

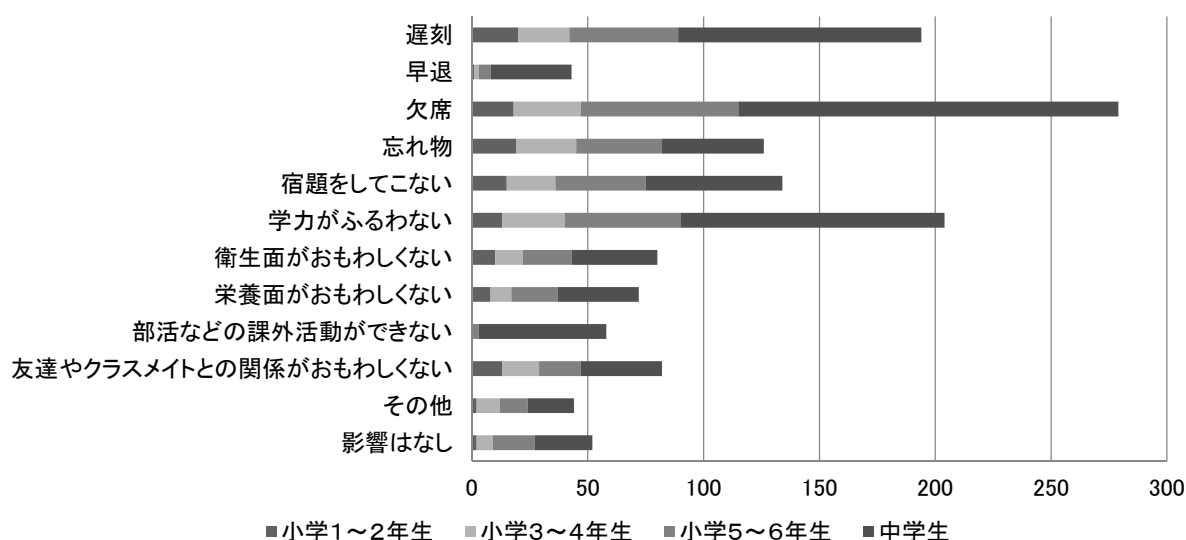
9) 子どもの年齢層と学校生活への影響

子どもの学校生活に次頁の表のような影響は出ていたかを尋ね、当てはまるものすべてに○をつけてもらう設問では、508 人の回答者中 497 人が回答していました（複数回答）。学校生活への影響としては、「欠席」「学力がふるわない」「遅刻」などが多くみられました。これらは、学年を問わず、ケアを担う子どもについて多くの先生が認識している特徴であることがわかります。「欠席」はそれぞれ

の年齢層で半数程度でしたが、中学生では64%が該当し、中学生になると「欠席」が多くなっているようでした。「部活動などができない」「早退」は主に中学生にみられる項目でしたが、衛生面や栄養面、友達関係、忘れ物、宿題などへの影響は、中学生は人数の割には少なく、むしろ小学生の場合に先生が挙げる割合が多いようでした。「影響はなし」と答えた回答も53ありました。

●子どもの年齢層と学校生活への影響

	小学生 1・2年 (34回答)	小学生 3・4年 (68回答)	小学生 5・6年 (135回答)	小学生 未記入 (4回答)	中学生 (256回答)	年齢層別 集計不能 (11回答)	合計 (508回答)
①遅刻	20	22	47	3	105	4	201
②早退	1	2	5	0	35	0	43
③欠席	18	29	68	3	164	4	286
④忘れ物	19	26	37	3	44	5	134
⑤宿題をしてこない	15	21	39	3	59	4	141
⑥学力がふるわない	13	27	50	3	114	5	212
⑦衛生面がおもわしくない	10	12	21	3	37	3	86
⑧栄養面がおもわしくない	8	9	20	2	35	4	78
⑨部活などの課外活動ができない	0	0	3	0	55	2	60
⑩友達やクラスメイトとの関係がおもわしくない	13	16	18	0	35	1	83
⑪その他	2	10	12	1	20	1	46
⑫影響はなし	2	7	18	0	25	1	53



※学年未記入や学年集計不可能な回答を除いたグラフ

「その他」を選択した回答者には、その具体的な内容を自由記述で書いていただき、それをグループ分けして分析しました。最も多かったカテゴリーは【感情、精神面への影響】(16回答)で、それをさらに細かくみていった内訳では、感情・精神面の不安定さ(9回答)、無気力(3回答)、幼さ(2回答)、被害感(1回答)、落ち着きのなさ(2回答)となりました。この自由記述欄には、選択肢で挙げた以外の【学校生活・学習面】への影響に関する記述も書かれており(10回答)、その内容は、日本語能力の問題(2回答)、学習への気力のなさ(1回答)、提出物が遅い(1回答)、不登校(3回答)、交友関係の悪化(1回答)、転校(1回答)といったものでした。次いで多かったカテゴリーは、

【疲労・負担】(5 回答：精神的負担、ストレス、疲労、寝不足など)でした。その他、【表情、容姿への影響】(3 回答：服装・髪型、表情の硬さ、暗さ)、【言動への影響】(2 回答：気の遣いすぎ、非行・自暴自棄など)、【家族関係への影響】(1 回答)、【生活面への影響】(2 回答：衣服の衛生不足、睡眠時間の問題)、【経済面の問題】(2 回答)なども挙げられていました。なお、詳細は「わからない」と答えた回答者も 4 人いました。

10) 教員が気づいたこと

「差し支えなければ、お気づきになったことを具体的にお知らせ下さい」という欄には、120 の自由記述回答が寄せられました。「家でのストレスを抱えたまま登校するので、表情が暗い日、落ちつかない日もあった」「疲れた様子で過ごしているときがあった」「夜遅くに家事をするので、宿題まで手が回らず、朝も起きられないときがたびたびあると話してくれた」「欠席が続き、家でもほとんど勉強する時間をとれていなかった」のように、児童や生徒の元気がなかったり、疲れていたり、勉強ができたりしていない状況にふれた回答は多くありました。小学生では、「体のおいが気になる」など、においについて書いた記述が 6 回答みられました。中学生では、「母親と口論し、家を飛び出したことが何回かあった」のように、家出について書いた記述が 8 回答あり、児童相談所などに保護されたことなどにもふれられていました。

11) そうした子どもや若者への対応

そうした状況にどのように対応したかを尋ねた欄には 289 の自由記述回答が寄せられ、それらをグループ分けして分析しました。

小学校では、普段から見守り、声をかける、話を聞くなどの【子どもへの見守り、相談、助言】が多くみられました。また、欠席した授業を補充する、宿題を一緒にするなどの“学習面のサポート”、洗濯や料理などの方法を教える“生活能力習得のサポート”、迎えに行くといった“登校のサポート”などの【課題・問題に対する直接的な支援】も多く挙げられました。さらに、【親（保護者）へのアプローチ】(親 [保護者] との面談、家庭訪問、保護者への指導・要請・助言など)、【学校内での連携】(担任、管理職、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、日本語担当教員、養護教諭など)、【学校外との連携】(児童相談所、子ども家庭課、教育委員会、民生委員など)が挙げられました。

中学校においても、小学校と同様、【子どもへの見守り、相談、助言】、【課題・問題に対する直接的な支援】、【親（保護者）へのアプローチ】、【学校内での連携】(学年職員、担任、他の教職員、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、養護教諭など)、【学校外との連携】(児童相談所、福祉課、関係機関、民生委員など)が挙げられていました。なお、【子どもへの見守り、相談、助言】では、服装、提出物の提出についての指導、学校へ意識を向けるよう指導していることに関する記述が、【課題・問題に対する直接的な支援】では、宿題の締め切りについて配慮するなど“学習面の配慮”に関する記述がありました。また洗濯をする、衣類を調達する、食料品を差し入れる、食べさせるといった“家事の代行・サポート”なども挙げられていました。

特別支援学校においても、【子どもへの相談、助言】、【課題・問題に対する直接的な支援】、【親（保護者）へのアプローチ】、【学校内での連携】、【学校外との連携】が挙げられていました。なお、ここでは【医療、福祉サービス】との連携もみられました。

校種によって大きな違いはみられず、共通して、子ども、親（保護者）に対して熱心にアプローチを図っている状況が見受けられました。中には、相談・助言、学習面での支援のみならず、洗濯、料

理の方法を教える、家事を代行するといった支援まで含まれている場合もありました。また、クラスの雰囲気づくり、友人の協力を得た対応など、学校教員ならではのアプローチもあり、さらに、学校内の教職員、専門職との連携や行政を中心とした学校外との連携を行い、組織的な対応が行われていることもうかがえました。なお、学校側に生徒を合わせるのではなく、生徒の事情に学校側が合わせる取り組みである【学習面での配慮】(宿題の締め切りへの配慮)が、中学校の教員(1名)によって挙げられていました。以上の取り組みが行われている一方で、対応方法がわからなかった、対応できなかったという記述も少なくなく、ヤングケアラーの支援方法、連携システムが十分に確立していない(もしくは周知されていない)なかで、苦慮している状況も見受けられました。

●そうした子どもや若者への対応(抜粋)

	小学校	中学校	特別支援学校	
子どもへの見守り・相談・助言	話をきく、相談にのる、見守る、声をかける	26	32	1
	(登校、入浴、服装・学習面など)指導する・助言する	5	5	1
	支持的に接する	3	5	-
	心のケア	2	2	-
課題・問題に対する直接的な支援	学習面のサポート	6	10	-
	(迎えに行く、学校準備など)登校のサポート	4	-	1
	生活能力習得のサポート	6	-	-
	家事(洗濯、衣類の調達、食事)の代行・サポート	-	4	1
	食べさせた	1	-	-
	進学・進路のサポート	-	1	1
	学習面の配慮	-	2	-
	体調への配慮	-	1	-
クラス・友人へのアプローチ	クラスの雰囲気づくり	2	1	-
	友人トラブルの解消	-	1	-
	友人の助け・協力を得る	2	-	-
親(保護者)へのアプローチ	親(保護者)と面談、指導・要請・助言	24	8	-
	保護者・家庭と連携	11	5	1
	家庭訪問	13	17	1
学校内での連携	親へのサポート、親を認める	3	-	-
	管理職と相談	1	-	-
	日本語指導担当への相談	1	-	-
	学校内での連携(情報共有、配慮を促すなど)	12	7	1
	養護教諭と担任の連携	-	4	-
	スクールソーシャルワーカー、カウンセラーとの連携	4	9	-
	児童相談所との連携	7	5	3
	子ども家庭課との連携	1	-	-
学校外との連携	行政・市・公的機関につなぐ	9	11	1
	ケース会議の開催	5	5	-
	委員会への報告	1	-	-
	民生委員との連携	8	8	-
	生活保護施設との連携	-	-	1
	医療・福祉サービスとの連携	-	1	1
	病院との連携	-	1	-
	外部機関との連携	5	7	-
対応できなかった	家庭への介入の困難さ	3	-	-
	保護者や本人の意識のため対応できなかった	-	3	-
	連携先がわからない	-	1	-
特に対応していない	対応方法がわからない	6	15	-
	支障がなかったため	4	2	-
	担当ではなかったため	2	7	-
	その他	3	9	-

12) そうした児童・生徒と関わる上で困ったこと

「そうした児童・生徒と関わる上で困ったことがあればお書きください」という欄に対しては、150の自由記述回答が寄せられました。それらをグループ分けして分析したところ、【学校生活・学習面】【児童・生徒の態度・言動】【児童・生徒とのコミュニケーション】【児童・生徒の親や親戚とのコミュニケーション】【教員への負担】【外部機関などの利用や連携】【困ったことは特になし】に大きく分けられました*4。

【学校生活・学習面】というカテゴリでは、小学校・中学校・特別支援学校に共通して「遅刻・欠席・不登校」と「提出物などの遅れ」が挙げられ、小中学校では「学力・学習の遅れ」（中学校では「学習意欲の低さ・学校への不適応」）「身だしなみへの影響」「持ち物（忘れ物など）」が挙げられました。遅刻・欠席による学習の遅れや学習意欲そのものの低下に対するフォローに先生たちが苦慮している様子がうかがえます。さらに中学校ならではの内容として「進路問題」に関する記述がありました。

【児童・生徒の態度・言動】というカテゴリでは、小中学校で「行動面への影響」「精神面・心理面への影響」「問題行動」が挙げられました。乱暴になったり感情の起伏が激しくなったりしていること、非行についてもふれられていました。【児童・生徒とのコミュニケーション】では、小学校・中学校・特別支援学校に共通して「コミュニケーションの難しさ」についての回答がありました。まず遅刻・欠席・不登校などにより子どもとのコミュニケーションが取れないことに苦慮している様子がうかがえました。さらに小中学校では「プライバシーへの介入の難しさ」が挙げられ、中学校では「他の生徒との関係」を繋げることの難しさについての記述がありました。児童や生徒のプライバシーにどこまで介入するか悩んだり、個別対応するなどの配慮をしたりしていることが見受けられました。

【児童・生徒の親や親戚とのコミュニケーション】でも、小学校・中学校・特別支援学校に共通して「プライバシーへの介入の難しさ」についての記述がありました。また小中学校で「協力が得られない、頼れない」「トラブル」「連絡が取れない、伝わらない」「家庭環境を知るのが困難」に関する記述があり、中でも「連絡が取れない、伝わらない」というアクセス困難の例が最も多く挙げられました。さらに親や親戚にアクセスできても、個人の生活にどこまで介入してよいかかわからず、先生たちが気を遣いながらコミュニケーションを取ろうとしている様子が垣間見えました。

【教員への負担】では、小中学校を通じ、教員として無力感や「限界を感じる」などの記述がみられました。また「過重な負担」については、度重なる家庭訪問や、外国語対応のための作業など（辞書などの準備他）業務上の負担が生じている様子がうかがえました。加えて中学校では「サポート手段がわからない、手段がない」ことについて5回答が寄せられていました。

【外部機関などの利用や連携】では、児童相談所や民生委員などに協力を仰いだり連携をしたりした際に上手く行かなかったことや、連携ができて子どもや家庭がサポートを拒否したケースについての記述もありました。

*4 自由記述回答を概念項目として数える際には、たとえば「家にも電話に出ないため、家庭訪問を多くした」という記述は、【児童・生徒の親や親戚とのコミュニケーション】の「連絡が取れない、伝わらない」と、【教員への負担】の「過重な負担」の2項目にカウントしました。

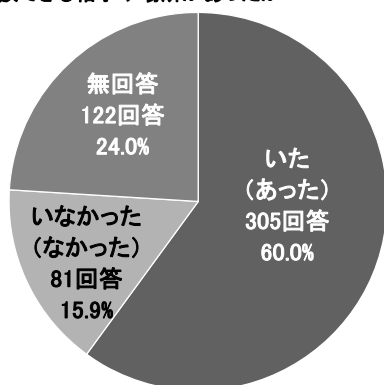
●そうした児童・生徒と関わる上で困ったこと(対象回答数=150)

		小学校 (56 回答)	中学校 (90 回答)	特別支援学 校(4 回答)
学校生活・学習面	学力・学習の遅れ	3	-	-
	学習意欲の低さ・学校への不適応	-	2	-
	遅刻・欠席・不登校	2	7	1
	提出物などの遅れ	3	1	1
	身だしなみへの影響	1	1	-
	持ち物(忘れ物など)	1	1	-
	進路問題	-	5	-
児童・生徒の態度・言動	行動面への影響	3	2	-
	精神面・心理面への影響	2	5	-
	生活習慣への影響	1	-	-
	問題行動	1	1	-
児童・生徒との コミュニケーション	コミュニケーションの難しさ	4	5	1
	プライバシーへの介入の難しさ	3	3	-
	他の生徒との関係	-	1	-
児童・生徒の親や親戚との コミュニケーション	プライバシーへの介入の難しさ	6	8	2
	協力が得られない、頼れない	2	3	-
	トラブル	3	1	-
	連絡が取れない、伝わらない	8	12	-
	家庭環境を知るのが困難	2	1	-
教員への負担	その他	1	-	-
	精神的・心理的負担、限界を感じる	2	4	-
	サポート手段がわからない、手段がない	-	5	-
	過重な負担	1	2	-
外部機関などの利用や連携	連携困難・トラブル	2	-	-
	連携したが解決できなかった	-	2	-
困ったことは特になし		10	14	0

13) 教員が相談した相手

児童・生徒と関わる上で困った時に相談できる相手や場所があったかという質問に対しては、「いた(あった)」が 305 回答、「いなかった(なかった)」が 81 回答、無回答が 122 という結果になりました。「いた(あった)」と回答した人が具体的に書いた 242 自由記述回答中で多かったのは、学内では、同僚(担任、他の教員、学年主任、ベテランの先生) 153 回答、管理職(校長、教頭) 69 回答、スクールカウンセラー 40 回答、養護教諭・保健室 17 回答でした。児童支援担当・支援部(11 回答)、学内チーム・ケース会議(5 回答)、きょうだいの担任(2 回答)などを挙げた回答もありました。学外の機関としては、市・市関連機関(子ども家庭課以外:生活保護、福祉課、障害福祉課、担当課名なし 22 回答)、児童相談所(15 回答)、スクールソーシャルワーカー(6 回答)、民生委員(6 回答)、子ども家庭課・子ども支援課(4 回答)、教育委員会(4 回答)などの記述がみられました。

●相談できる相手や場所があったか



●具体的な相談相手・場所(対象回答数=242)

		小学校 (116 回答)	中学校 (118 回答)	特別支援学 校(8 回答)	合計 (242 回答)
学内	同僚(担任、他の教諭、学年、学年主任、ベテラン)	69	79	5	153
	以前の担任	1	0	0	1
	きょうだいの担任	2	0	0	2
	養護教諭・保健室	11	6	0	17
	栄養士	2	0	0	2
	国際理解教室	1	0	0	1
	通級教室	1	0	0	1
	児童支援担当・支援部	9	2	0	11
	管理職(教頭・校長)	41	24	4	69
	スクールカウンセラー	19	20	1	40
	学内チーム・ケース会議	1	4	0	5
学外	小学校	0	2	0	2
	きょうだいの通う学校	0	1	0	1
	教育委員会	3	1	0	4
	スクールソーシャルワーカー	3	3	0	6
	児童相談所	9	5	1	15
	子ども家庭課・子ども支援課	3	1	0	4
	市・市関連機関(子ども家庭課以外:生活保護、福祉課、障害福祉課、担当名なし)	11	9	2	22
地域	民生委員	2	4	0	6
	すまいる児童クラブ	1	0	0	1
	PTA 役員	0	1	0	1
	ボランティア	0	1	0	1
家庭	0	1	0	1	

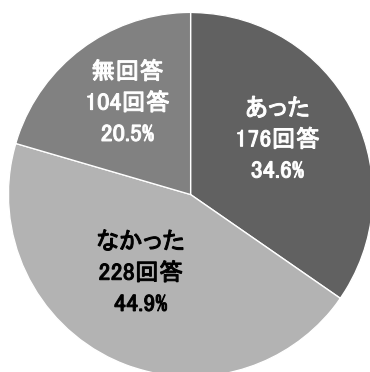
14) 他機関との連携

他機関との連携については、「あった」と答えたのが 176 回答 (34.6%)、「なかった」と答えたのが 228 回答 (44.9%) でした。「あった」と答えて具体的に書いた自由記述 157 回答の中で多かったのは児童相談所 (87 回答) で、回答者の 2 人に 1 人以上となっています。次いで、民生委員 (28 回答)、市の子ども家庭課 (27 回答)、市の子ども家庭課の関連担当 (26 回答：ソーシャルワーカー、子ども健康課、生活保護、福祉、修学援助担当、生活困窮者支援など。以上は回答のまま)、スクールカウンセラー (26 回答)、スクールソーシャルワーカー (18 回答)、学習支援教室 (10 回答) などでした。複数の機関を挙げたのは 78 回答であり、約 5 割となっています。子どもたちが抱える問題の複雑さがうかがわれます。また、チーム会議で情報を共有し対応しているのは 22 回答でした。

小学校と中学校を比較すると、小学校では民生委員との連携が 69 回答中 20 回答 (29.0%) と目立っています (中学校は 83 回答中 8 回答、9.6%)。中学校では、警察との連携が 5 回答、また、チーム会議が 17 回答 (20.5%) と特徴的でした (小学校は、警察との連携 1 回など、チーム会議は 5 回答、7.2%)。

さらに、「子ども家庭課で、食事をつくってくれたり、買い物したり、週に 2 日位でも面倒をみてくれる人を捜してくれた。近所のその方の相談にもよくのってくれていたようだ。民生委員さんなども連絡をまめにとってくれていた」「生活保護施設は家族の宿泊場所の提供をしてくれ、学校の面談などにも職員さんがいらして、とても協力的でした」などの記述からは、行政が関わることで、家庭生活の支援ができていくことがわかりました。

●他機関との連携はあったか



6. 教員としてできるサポート、役立つ支援 (問8)

ここでは、「小学生・中学生が家族のケアをするために、自分の学業や友達づきあい、部活などに大きな影響が出ていることを知った場合、あなたは教員として、どんなサポートができると思いますか？ また、どんな支援が役立つと思いますか？ あなたの考えを自由にお書き下さい」という欄に書いていただいた自由記述回答を分析しました。アンケートに回答して下さった 1,098 人のうち、半数以上にあたる 702 人の先生が回答を寄せて下さいました。

代表的な記述としてみられたのは、以下のような意見です。

「できるだけ本人の話を聞く。親 (保護者) とともに面談や電話連絡をして学校での様子を伝え、改善策を一緒に考えていく」

「その子の現状を知り、児相やカウンセラーなどと連携して負担を減らせるよう伝える」
「ひとりて抱え込んで難しいし、どこまで支援できるか自信がないので、学校全体、外部機関などの協力を得ながら、みんなで支援方法やそれぞれの役割を分担して支援できればと思う」
「相談がないと状況がわからないので支援まで至らない。家庭の中にどの程度入り込んで良いものか悩む」

これらの記述をサポート対象者別に分けると、①児童・生徒に対してのサポート、②親に対してのサポートがありました。また、サポートをする際に、連携する人や機関別にみていくと、③学内の教職員、④学外の関係機関がありました。

- ① 児童・生徒に対しては、話を聴く、相談や悩みを打ち明けてもらえる関係を築く、状況を把握する、労いや思いに寄り添う、といった心のケアを軸にした対話をするなどが挙げられました。さらに、学業に専念できる環境をつくることや、不登校にならないよう居場所をつくること、補習などの個別の学習支援を行うことなどもみられました。
- ② 親や保護者に対しては、連絡を密にする、家庭訪問をして対面で状況の把握を行う、経済的な支援など利用可能な制度を調べて紹介する、生活支援サービスを行う相談機関への橋渡しをする、といったサポートが挙げられました。
- ③ 学内の教職員との連携については、管理職に相談して対応する、担任や学年職員や養護教諭などと情報共有を行う、学校全体で共通理解を図り一人で抱えないことなどが書かれていました。
- ④ 学外の関係機関との連携については、児童相談所、福祉事務所などの行政機関、ケアマネジャー、ホームヘルパー、保育園、放課後デイサービスなどの福祉の相談機関、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、民生児童委員などが協力を求める先として挙げられていました。連携のあり方としては、学外の関係者とケース会議を行い、情報や課題を共有し、対応方法、改善方法を検討するという方法が述べられていました。

これらを踏まえて、教員としてのサポートを整理すると、その児童・生徒の話を丁寧に聴いた上で、必要に応じて、学習面のサポート、心理面のサポート、情報面のサポート、学校生活の環境調整を行うことが重視されているようです。親や保護者に対しては、生活支援を行う機関を紹介するなど情報の提供に関するサポートが多くみられました。また、早期に発見し、すばやく対応を行うことの必要性も指摘されていました。

ただ、実際には、児童・生徒の状況に気づくことが難しいといった点やどのようにサポートをすればよいかわからないなどの問題もあります。支援をする上で、実際にどこまで児童・生徒の家庭生活に踏み込んでいけるのか、外部の相談機関にどのように助けや協力を求めたらよいかわからないなどの記述もあり、支援の難しさについて先生方の率直な意見が寄せられていました。

2016年7月

ケアを担う子ども（ヤングケアラー）についての調査

日本ケアラー連盟 ヤングケアラー・プロジェクト

あなたの基本情報についてお伺いします。

問1 あなたの性別についてお知らせ下さい。(○は1つ)。

1 男性 2 女性 3 その他

問2 現在あなたが勤務している学校についてお知らせ下さい。(○は1つ)。

1 小学校 2 中学校 3 特別支援学校

問3 今年度、あなたは担当を務めていますか？

1 担任をしている → クラスの人数をお知らせ下さい。() 人

2 担任をしていない

ケアを担う子どもについてお伺いします。

問4 今までは、「ヤングケアラー」もしくは「ケアを担う子ども」などの言葉を聞いたことはありますか？(○は1つ)

1 ある 2 ない

問5 今年度、あなたが教員として関わっている児童・生徒の中で、家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒はいますか？(ケアの期間、内容、程度は問いません。) 1と2のそれぞれについて、当てはまるものに○をつけ、「いい」、「わるい」という場合にはその人数をお答え下さい。

問5-1 自分が担任をしているクラスの中に

1 いる → () 人

2 いない

3 わからない

問5-2 自分が担任をしていないクラスの中に

1 いる → () 人

2 いない

3 わからない

問6 過去に(前年度まで)、あなたが教員として関わった児童・生徒の中で、家族のケアをしているのではないかと感じた児童・生徒はいますか？ 1と2のそれぞれについて、当てはまるものに○をつけ、「いい」という場合にはその人数をお答え下さい。

問6-1 自分が担任をしていたクラスの中に

1 いた → () 人

2 いなかった

3 わからない

問6-2 自分が担任をしていないクラスの中に

1 いた → () 人

2 いなかった

3 わからない

問5・問6の両方に「いい」「わるくない」と答えた方は、問8へ進んで下さい

問7 問5と問6で「いい」とお答え頂いた中で、最も印象に残る児童・生徒1人についてお伺いします。問5で「いい」に○をつけられた方は、今年度の児童・生徒1人についてお答え下さい。

問7-1 その子どもは今年度あなたが担当をしているクラスの児童・生徒ですか？

1 はい 2 いいえ

問7-2 その児童・生徒は、その時、何年生でしたか。(今年度の場合は、今、何年生ですか？) 該当する学年に○をつけ、学年をお答え下さい。

(小学 / 中学) → (年生)

問7-3 その児童・生徒の性別についてお答え下さい。(○は1つ)。

1 男性 2 女性 3 その他

問7-4 その児童・生徒の家族構成についてお答え下さい。(○は1つ)。

1 母親と子ども 2 父親と子ども 3 母親と子どもと祖父 4 父親と子どもと祖母 5 ふたり親と子ども 6 ふたり親と子どもと祖父母 7 祖父母と子どものみ(通信によって他の親が同居するものも含む) 8 その他(具体的に) 7 わからない

問7-5 その児童・生徒は誰をケアアリアしてありますか、いましたか？ また、その児童・生徒がケアをしている相手は、どのような状態にありますか？ 当てはまるすべての人に○をつけ、その人の状態を下の枠内の①～⑩から選び() に記入して下さい。

児童・生徒がケアアリアしているその人の状況が具体的に**工業上**にお書き下さい。

例) ② 父 () ⑩ 母 () ⑧ 知的障がい ④ 視覚障がい

1 母 () ⑥ 精神疾患 ⑨ 依存症 ⑤ 脳性麻痺

2 父 () ⑦ 依存症 ⑧ 弱い

3 きょうだい () ⑩ その他 ⑩ わからない

4 祖母 ()

5 祖父 ()

6 その他(具体的に) () ()

7 わからない

① 鬱などの病気 ② 身体障がい ③ 知的障がい ④ 視覚障がい

⑤ 脳性麻痺 ⑥ 精神疾患 ⑦ 依存症 ⑧ 弱い

⑨ その他 ⑩ わからない

問7-6 その子どもは何をしていますか、(いましたか)？ 当てはまるものすべてに○をして下さい。

1 家事(料理、掃除、洗濯など)

2 生活をまわしていくための、買い物、家の中の修理仕事、重いものを運ぶなど

3 読書書の支払い、病院への付き添いや通院など

4 身の回りの世話(食事や着替えの介助、移動介助など)

5 医療的な世話(服薬管理、たんの吸引など)

6 感情的なサポート(ケアの受け手の精神状態を伺って言うことに対応すること、落ち込んでいる時に元気づけることなど)

7 身体介助(入浴介助やトイレ介助、体拭きなど)

8 きょうだいの世話

9 その他(具体的に)

10 わからない

問 7-7 その児童・生徒がケアをしていることに、どのようにして気付きましたか？

問 7-8 その児童・生徒はどれぐらいの間、家族のケアをしているか(していたか)知っていますか？

1 知らない
2 知っている → () 年 () ヶ月 ぐらい

問 7-9 その児童・生徒がケアをすることになった理由を知っていますか？

1 知らない
2 知っている → 問 7-9 a 以下の当てはまる理由すべてに○をして下さい。

1) 親の病気・障がい・精神疾患や、入院のため
2) ひとり親家庭であるため
3) 親が仕事で、家族のケアに充分に携われないため
4) 祖父母の病気や加齢、入院のため
5) 年下のきょうだいがいるため
6) きょうだいに障がいがあるため
7) 親が家事をしない状態のため
8) 福祉などのサービスにつながらないため
9) 自発的に
10) 他にやる人がいなかったため
11) その他

問 7-10 差し支えなければ、具体的にその状況をお知らせ下さい。

問 7-11 その児童・生徒の他に、その家庭を支援している人はいましたか？

1 いない 2 わからない
3 いる → 問 7-11 a ご存知の範囲で、当てはまるものすべてに○をして下さい。

1) 親戚 2) 近隣・ボランティア 3) ホームヘルプサービス
4) 訪問診療・訪問看護など 5) デイサービス・ショートステイなど
6) 具体的にはわからない 7) その他 ()

問 7-12 その児童・生徒の学校での生活に以下のような影響は出ていますか？ 当てはまるものすべてに○をして下さい。

1 遅刻 2 早退 3 欠席 4 忘れ物 5 宿題をしてこない
6 学力がよくなる 7 衛生面がおもしろくない 8 授業面がおもしろくない
9 部活などの課外活動ができない
10 友達やクラスメイトとの関係がおもしろくない
11 その他 () 1 2 影響なし

問 7-13 a 差し支えなければ、お預けになったことを具体的にお知らせ下さい。

問 7-13 b その状況にどう対応しましたか？(対応する方法がわからなかった)ということでもかまいませんので、お書き下さい。

問 7-14 その児童・生徒と関わる上で困ったことがあれば、お書き下さい。

問 7-15 その時にあなたが相談できる相手や場所がありましたか？

1 いなかった(なかった)
2 いた(あった) 具体的に ()

問 7-16 他の機関との連携がありましたか？

1 なかった
2 あった → 問 7-16 a どんな機関とどんな連携があったか、具体的にお書き下さい。

問 8 小学生・中学生が、家族のケアをするために、自分の学業や友達つきあい、部活などに大きな影響が出ていることを知った場合、あなたは職員として、どんなサポートができると思いますか？
また、どんな支援が役立つと思いますか？あなたのお考えを自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございます。
入っていた封筒に戻して封をし、回収箱に入れて下さい。返却締切日：7月30日(土)

問 7-7 その児童・生徒がケアをしていることに、どのようにして気付きましたか？

問 7-8 その児童・生徒はどれぐらいの間、家族のケアをしているか(していたか)知っていますか？

1 知らない
2 知っている → () 年 () ヶ月 ぐらい

問 7-9 その児童・生徒がケアをすることになった理由を知っていますか？

1 知らない
2 知っている → 問 7-9 a 以下の当てはまる理由すべてに○をして下さい。

1) 親の病気・障がい・精神疾患や、入院のため
2) ひとり親家庭であるため
3) 親が仕事で、家族のケアに充分に携われないため
4) 祖父母の病気や加齢、入院のため
5) 年下のきょうだいがいるため
6) きょうだいに障がいがあるため
7) 親が家事をしない状態のため
8) 福祉などのサービスにつながらないため
9) 自発的に
10) 他にやる人がいなかったため
11) その他

問 7-10 差し支えなければ、具体的にその状況をお知らせ下さい。

問 7-11 その児童・生徒の他に、その家庭を支援している人はいましたか？

1 いない 2 わからない
3 いる → 問 7-11 a ご存知の範囲で、当てはまるものすべてに○をして下さい。

1) 親戚 2) 近隣・ボランティア 3) ホームヘルプサービス
4) 訪問診療・訪問看護など 5) デイサービス・ショートステイなど
6) 具体的にはわからない 7) その他 ()

問 7-12 その児童・生徒の学校での生活に以下のような影響は出ていますか？ 当てはまるものすべてに○をして下さい。

1 遅刻 2 早退 3 欠席 4 忘れ物 5 宿題をしてこない
6 学力がよくなる 7 衛生面がおもしろくない 8 授業面がおもしろくない
9 部活などの課外活動ができない
10 友達やクラスメイトとの関係がおもしろくない
11 その他 () 1 2 影響なし

藤沢市 ケアを担う子ども(ヤングケアラー)についての調査《教員調査》 報告書

2017年6月25日 発行

執筆・編集 日本ケアラー連盟 ヤングケアラープロジェクト
青木由美恵(関東学院大学) 澁谷智子(成蹊大学) 田中悠美子(文京学院大学)
濱島淑恵(大阪歯科大学) 堀越栄子(日本女子大学) 松崎実穂(国際基督教大学)
持田恭子(ケアラーアクションネットワーク) 森田久美子(立正大学) 渡辺道代(東洋大学)
(事務局)中林祥子 野手香織

発行 一般社団法人日本ケアラー連盟
E-mail. info@carersjapan.com web サイト. <http://carersjapan.com>